

戦中戦後知識人の担った使命と役割(5)

CHOI, Seonho / 崔, 先鎬

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / 法学志林

(巻 / Volume)

107

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

74

(発行年 / Year)

2010-01-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006444>

戦中戦後知識人の担った使命と役割 (五)

崔 先 鎬

1 もう一つの軸、社会主義系列の知識人——立証可能な学問としての科学主義

近代期の朝鮮半島において大きな役割を果たしたと考えられる知識人の系譜には、二つの潮流があると考えられる。ひとつは、先述した尹致昊^{ユンチホ}などキリスト教信仰を軸とするものであり、もうひとつは、社会主義すなわちマルクス主義を軸とするものである。朝鮮半島におけるマルクス主義の歴史も、他国と同様の時期に移入されたものだが、これは現代の北朝鮮の成立へとも結びつくものである。代表的なマルクス主義知識人として、列挙可能な人物は多々存在するものの、現在の南北対置における政治的状況から資料が絶対的に不足しており、筆者の力の及ばないような現状が存する。ここでは洪命憲^{ホンミョンセン}（一八八八—一九六八？）と安在鴻^{アンジエホク}（一八九一—一九六五）の名前を挙げることにする。彼らの言動を通じて、日本の植民地期においてどのような思想的展開が見られたかを振り返ることにしたい。

戦中戦後知識人の担った使命と役割 (五) (崔)

洪命憲は、マルクス主義作家であり、作家仲間のリーダー的存在として活躍した人物である。彼は、日本による文化統治が本格化していた一九二〇年代から、無産者階級出身ではないにも拘らず、プロレタリア文学を通して階級闘争を目指した。遺憾ながら、洪命憲の情報は年譜的次元ではこれ以上詳述不能である。彼らの時代背景について一言するならば、活躍していた時期にあたる一九二五年四月に大日本国法律第四十六号として公表された治安維持法が、「朝鮮およびサハリンにおける治安維持法」として五月一二日から施行されたことは非常に重大な側面を有している。朝鮮の安定的植民地統治を願う朝鮮総督府の意志により、法の適用面では朝鮮の方がはるかに厳しく、独立運動を団体の転覆をはかるものと見なした結果、多くの知識人および運動家に死刑判決が出されている。社会主義運動も治安維持法の対象となり、朝鮮に於いては両者の運動が重複していた所により多くの困難が生じたのであった。他方、安在鴻は、洪命憲と活動を共にした同人であり、近代期における時代的狀況が厳しいからこそ階級的論争を積極的に展開する必要性があることを強調した。一九一四年、日本の早稲田大学政経学部を卒業した彼は、早くも日本の近代化を目撃し、日本というフィルターを通して西欧的学問と合理性を味わったのである。人類の歴史は階級的論争が前提になるべきとみていた彼は、朝鮮の歴史が自力で一定の近代的歴史発展に至る前に外来的力によって没個性化されたことこそが、歴史的断絶の原因でありなお且つ階級闘争による内部的再編成の必要とされる一側面であると考えていた。彼は、歴史を支配する外部における絶対的力を統制可能なものにできる段階まで誘導することが必要であって、これは闘争と合意によって内部的階級が親密・平等化される時に可能となるものと判断していた。彼は民族とは闘争を通して形成された歴史的结果物であり、この民族の独立と自由、そして完全なる生存のためには、意識を形成する同一の言語と文化が必要であると考えていたのである。

まず、独立運動家であった洪範植^{ホンパンシク}を父として持つ洪命彦は、社会主義者として、客観的事実と科学的根拠による思考を重視しつつ、この事実に基づいた科学的秩序と実質的言語を使用した表現を充実させることに力を尽くした。彼は「科学とは、実験・観察・比較・推理などの統一によって形成され、これが一科の学問を形成し、個々の知識的理法に到達することを目指すものであるが、広い範囲では自然界の現象について研究を行う自然科学と思想的行為における真の法則について研究を行う社会科学を包括する⁽¹⁾」と定義した。また彼はこれに加えて学問における科学の認識を「純理的 (Theoretical Science) 科学としての数学 (mathematics) や物理学 (physics)」、哲学 (philosophy)」「実践的科学 (Practical Science) としての倫理学 (ethics) や経済学 (economics)」、政治学 (politics)」「そして「創造的科学 (Creative Science) としての詩学 (poetics) や美学 (aesthetics)」の三つの種類に分けて分類した。彼は、科学における定義的概念と共に分類を加えることで論理的「反論を同時に行う形態をなすものとし、社会科学の革新を通じた社会的進歩の必要性を認識すること」に到達したのである。

彼は、自然と社会における現象を言語化並びに記号化するものが学問の役割であると判断していた。近代物質文明を保有している欧米諸国や日本においては活版による印刷文化が既に普及し、ここから生まれた数々の出版・印刷物によって概念を標準化し、一律的コードを形成することで思想的物事を規定するという有り様を看取していた。このことで、教育体制の確立や地域教育統合などの実践的学問の実現が可能であったと彼は見ていた。マルクス主義作家でありながら多くの論文を発表したが、彼が自らの文書を通して残したりアリティの表現によるマルクス主義イデオロギーの展開は大きく評価されるべきと思われる。彼は、一九二三年七月に社会主義思想について研究を行った新思想研究会を創設し、社会主義思想の理論的研究を本格化させた。彼は、一九二六年一月には朝鮮プロレタリア

芸術家同盟 (KAPF, Korea Artista Proleta Federatio) の機関誌となった『文芸運動』第一号に「新興文芸の運動」を、続けて第二号には「芸術起源論の一説」という論文を発表し、マルキシズムを前提とした自らの思想を展開した。『文芸運動』は朝鮮プロレタリア芸術家同盟の準機関紙とも呼ばれていた出版物であり、マルキシズムがこれまでの自然発生的段階から階級イデオロギーによる目的意識を明確に強調する段階へと移行すると同時に社会的活動を本格化した契機は、この『文芸運動』の出版の実現によるものであった。この時期からのプロレタリア文学は、階級闘争を目標と設定したことから、組織内部のプロレタリア文芸に関わる創作方法論に係る論争と共に、対外的には植民地状況における独占資本主義 (monopoly capitalism) との併存関係という時代的現実との対置という局面において激しい原論的論争と直面することとなる。植民地争奪戦の自由競争体制の中、軍事力及び資本力による地域と地域、国家と国家の間に生じる独占的ヘゲモニー (Hegemonie) の登場の問題に真正面に直面することとなった植民地の知識人たちは、このような状況を克服するための活動を至上命題として設定していたものと考えられる。歴史的に絶対的自由競争の段階にあった当時の状況における資本主義体制のもとで、早くも近代化に成功した日本の場合には、工業的生産技術の保有、並びに大規模な財閥資本の登場とこれが超国家主義体制と融合することによって積極的かつ支配的国家権力が発芽したと考えられる。

2 社会主義論議の背景と経緯——文化についての並行的認識

この時代の朝鮮においては、多くの国々と同様に社会における弱肉強食的状况を克服する新たな形態の思想的動き

としてのマルクス主義論議が活発化していたが、とくにこれは日本という国民国家へと編入された結果として、国家的搾取の対象となった被植民地体制に異議を唱え、対置可能な思想として激しい盛り上がりの様子を見せながら半島のなかで出現したものであった。洪命憲は論文において使用される語彙の言語的意味が、社会制度的次元を反映したものととして拡大可能な積極的解釈を行いながら、一つの語彙が有する意味とは、全ての人間社会の制度と文化にまで関連しているものと認識していた。彼は、言語とは意識下の刺激を抽象化した上にそれを概念化することによってある社会環境に反映されるものと見なしていた。すなわち、ある単語並びに語彙の再解釈を通して、ある時代と社会的文化の実態の把握が可能であり、言語的語源について遡って考察してみることで、この過程に於いて歴史の実態を部分的に究明することができると考えていたのである。洪命憲は「文化とは言語によって形成されるものであり、その文化の継承のために人間は過去から有する言語的経験をもとに過去と現在の経験を未来のものに生かし言語能力を発揮するものである」と述べているが、これは近代的意識と社会的自我の誕生における歴史的言語の重要性を言い表しているものであろう。彼はとくに「中央都会であるソウルの上流社会の言語に全国の方言等を加えて発音と語彙・語法に人為的修正を加えた標準語表記による文化的産物の標準化」に基づいた「社会的自我の確立」の重要性について強調した。日本の植民地として、既に文化統治による日本語の使用が普通になってきたこの時期に、彼は朝鮮語の使用による「文化的産物」の継承、すなわちもともとの母国語である朝鮮語を使用したマルクス主義の普及の展開を試みていたのである。彼からすれば、文化「統治」とは「文化的統治」、或いは「文化抹消的統治」であり文化支配であったものと考えられる。

一九二四年五月に洪命憲は「東亜日報」の主筆として、新思想研究会、火曜会、朝鮮事情調査研究会などに参加し、

戦中戦後知識人の担った使命と役割（五）（崔）

社会主義的傾向の思想研究を行いつつ、この時代において社会主義を普及し、この主体として活動することを様々な論文の発表を通して実践していた。これら研究会の活動だが、「新思想研究会」においてはマルキシズム研究を中心とする社会主義思想の研究および主なる目標として社会主義革命のための社会運動を展開した。また、マルクスの誕生日であった一八一八年五月五日の火曜日を記念して作られた「火曜会」においては、プロレタリア・労働者を対象とした機関誌の発行と労働者らが親しみやすく朝鮮語で翻訳された社会主義的思想性の高いいわゆるポリシェヴィキ文学を使った読書教育を、「朝鮮事情調査研究会」においては、文化統治下の植民地朝鮮における社会状況と文化的現状の把握を通して、文化的自立をも主眼に据えた自主独立の成就を究極的目標として設定していたのであった。彼らがKAPF系列の作家たちと関連を持ち始めた一九二六年には、KAPFの機関誌『文芸運動』創刊号において、プロレタリア文学の必要性和社会主義の活発化を目指した新文芸運動の一環として現実化した朝鮮プロレタリア芸術家同盟の活躍を願う意志を込めて「新興文芸の運動」を投稿した。以降、社会主義系列の新聞社「時代日報」を新興文芸運動の重要な拠点としつつ、「文芸史上において古代の宮廷文学 (Court Literature) が、また宗教文学 (Religious Literature) が、文芸復興 (The Renaissance) によって弱体化し、新しい個人主義文学 (Individual Literature) がこれの代わりになった時期、これらを指して新興文芸 (New Literary Arts) と名付けたことを私たちは知っている。自然主義 (Naturalism) は、例えば、悲惨な生活の中で苦しむ農民を描こうとしても、これはただの悲惨な状態そのものを描くことに過ぎない、ここから作家の態度を発見しようとしても、それは悲惨な状態に対する同情にすぎないことであり、極めて不合理な制度下の中で搾取される階級を描こうとしてもそれについての優越感から生じる同情に過ぎないことが事実である。世界に於いてまったく新しい階級の発生が不可避な時代になったので、今日の時代

は社会変革・階級打破・対抗・解放などの思想が必要であり、この時代の文芸がこれらを中心的思想として設定し新しく出発することは当然のことである³⁾と述べつつ、マルキシズム的なリアリティーを生かした文芸活動を目指していたのである。

友人の安在鴻は、階級間の闘争でプロレタリアが勝利するためには全世界レベルのプロレタリア階級の団結が必要であると呼び掛けるとともに、プロレタリアの優位によって全世界の民族が一つの方向に向かうことができる⁴⁾と判断していた。世界プロレタリアの大団結こそが民族間の地域紛争や戦争をなくし平和を保てるようになり、世界における民族文化が相互共存的に国際関係を形成することができると考えていた彼は、個人と社会、民族と人類全体の持続的発展の条件とは、民族アイデンティティーを保持し階級における差別意識をなくすことであると判断しつつ、延いては経済的平等の基礎を保障するものである⁴⁾と考えていたのである。ここで各々の「民族」が指している意味とは、固有の風土と自然、習慣が前提になって現実化するものである彼はと考えていた。民族とは伝統と郷土、文化、政治、経済などを共有する共同体 (Gemeinschaft) であり、これらを意識的に持続して行こうとする意志が民族主義 (Nationalism) と述べつつ、民族的個性性を基に、それぞれの人々の遅滞した生活水準を改善するための力量を伸ばしていくための真面目な生活的協力関係のための闘争が新民族主義の前提である⁵⁾と意味づけた。そして彼は、民族とは闘争を通して形成された歴史的集合体であり、一定の地域と空間における協同的生活体、かつ運命共同体としての生活共同体である、この民族の自由と完全な生存を擁護するためには、意識を込めた同一言語と同一の血統を守っていかなければならないと強調しつつ、各民族の運命はそれぞれの民族自らが決定すべきであるとした民族自決の論理を同時に強調することで朝鮮の独立の必要性を世界に向けて強く訴えたのである。そのためには国力の養成と教育

の新興、産業の発展、そして物産奨励運動などによる社会運動と共に、階級および社会革命を通し内部を整える必要性があると説明した彼の考え方からは、階級的社會革命論とまでは言えないが、民族の独立を念頭にいた考察の結果、果物であったことがうかがえるのである。

3 文芸を通した思想の展開——新幹会活動

洪命憲は自然主義文学の中で言及される農民の悲惨な姿に対する同情心や優越感などが正しくないと考えつつ、むしろ産業化の科学技術的側面における歴史的有効妥当性、そして社会発展における正当性と合理性などの現実から生じる不可避な階級形成と社会変革に焦点を当てた。彼の左派的志向性は、一九二〇年代の日本におけるマルキシズムの展開とこの日本のマルクス主義者たちへの関心によるものであった。洪命憲は「階級変革運動」、すなわちプロレタリアによる階級変革運動を通して社会変革そのものに関心を持つようになり、『新小説』創刊号において「我が社会は分裂の社会であり、矛盾の社会であるなり、このような社会の中から生み出される芸術はこのような社会の特質を含まざるをえないのである、問う！ 芸術は社会的矛盾を超越できるのか、社会的矛盾を隠蔽するよりは、この矛盾を明白にした方が大胆な態度ではないだろうか、例えば芸術家といっても一人の人間に過ぎない、人間の社会を抜け出した神ではなく獣ではないなり」と主張し、社会における矛盾を事実に表出した状態から社会主義的な変革が可能であるということの説明している。洪命憲の意識世界は、社会における「事実性の究明」に中心をおきつつ、事実的言語秩序の確立による適切な語彙を使用した表現形式を生むに至ったものと考えられる。彼は厳密な自我批判を通

して偏見を切り離すことで言語的發展を図りながら、社会的・経済的關係におけるプロレタリア階級の存在意義の表現在に専念したものと判断することができる。

洪命憲は、一方で「新幹会」に賛同することで、また違う形態の人為的変身、すなわちインテリ自らの手による組織的な活動を試みるが、多くの知識人が同意していた社会における「進歩」の論理には同意せず、個々人における「自我」を確保することこそが社会的發展の原動力であると主張した。彼は、この自我を確立するために必要不可欠なことは何より植民地主義からの独立、文化的支配からの解放が肝要と判断していた。早くもレーニン (Vladimir Il'ich Lenin, 1870-1924) が一九二〇年六月にコミンテルン (Komintern) 第二次会議において「改革的ブルジョアとの連携による植民地主義と帝国主義への闘争」、すなわち、対帝国主義戦争は社会主義革命の突破口になると述べたことは知られている。これについて、第一インターナショナルの理論家カウツキー (Karl Johann Kautsky, 1854-1938) は社会主義と民主主義は不可分であり、労働者階級が少数で未熟なロシアの革命は時期尚早であり、ボルシエビキの一党独裁体制に頼らざるを得ないロシア社会主義は、社会主義の大義に有害であるとして論争を呼び掛けた。結果的には、彼が社会主義への平和的移行の可能性を説き、歴史の飛び越しは不可能であると力説したことに対し、レーニンがカウツキーとは理論的に鋭く対立したことも広く知られている。

この対立は、以後ブルジョアジーの賛同者である社会民主主義者こそが最も憎むべき敵であり、社会民主主義者と社会ファシズムを打倒せよとの激しいスローガンが全世界共産党に発せられ、二人の対立は以後国際共産主義活動に大きな影を落とした。このこと自体、社会民主主義者と共産主義者の不和の底には、世界革命の展望に対する相違があったことを証明することでもあり、経済が疲弊し、社会が流動しているとき、飢餓とテロルが横行する革命的変革

を社会民主主義者は受入れられなかった。組織労働者の多くも社会民主主義者の考えを支持したが、ヨーロッパではボルシェビキの呼びかけには労働者は動かなかったのである。このような出来事を参考にし、かつこれらの影響を受けて、洪命憲は、社会主義系列の新聞社「時代日報」を新興文芸運動の重要な拠点としつつ、KAPFの活動が本格化した一九二六年から一九二七年にかけて、彼らの民族運動戦線系列と同時的に並行する形で新幹会を設立した。初めは「新韓会」としたが、朝鮮総督府の設立審査で「韓」の字を入れることを認めてもらえなかったため、「幹」に変えて「新幹会」と名前を決定した。「新幹会」は、洪命憲と最も近い友人であった安在鴻ら知識人と文芸人を合わせて二十八人の賛同により作られ、対外的には新たな流れの文芸活動を標榜していた組織だが、実際にはプロレタリアによる階級変革に加えて、植民地統治下の祖国における国権の回復を目指す知識人サークルであった。とくに国権の回復については、思想と理念の差などはないと考えていた知識人たちは、反帝国主義と民族の解放を主なる目標としたプロレタリア階級の蜂起を目指す必要性があると考えていた。洪命憲は、新幹会の創立時から組織部幹事を担当、一九二九年七月からは中央常務執行委員を務めながら、全国において講演会を広げた。この全国講演会を契機として一九二九年一月二三日には植民地統治への抗議と朝鮮の独立を求めて「光州学生事件」が勃発した。当時の官憲当局はこの事件に対する主なる責任者として洪命憲を指目し、彼は四年間にわたって投獄されることとなった。主なる責任とは、全国講演会において善良な学生たちに不純な言動で独立運動並びに対植民地解放戦争を扇動したとのことであった。洪命憲は集団的「自我」として民族を設定し、「我々の民族運動は、もはや政治意識の前提となっている、将来的にわが民族のための運動の目標はただ一つであり、その目標の達成は我々の努力次第で実現するものであろう、我々は継続的・組織的な行動で努力しなければならない、このような努力こそが新幹会の使命である」と主張し、こ

れを新幹会の存在意義と考えていたのである。

新幹会の活動が本格的な軌道に乗り始めた一九二八年一月から朝鮮日報において洪命憲は小説『林巨正』^{（イムグジョン）}を連載することとなった。林巨正とは、封建社会において最も抑圧されていた白丁（ベクチョン）階級の人物の名前であって、社会における経済的・身分的秩序に不満を強く感じる人物であった。白丁とは、朝鮮社会において、公民としての権利も義務も持たない公的職分なしの完全な小作農階級を指すものであるが、この白丁の身分の彼が社会的構造の矛盾点を直視しつつ、暴力による社会の改革を夢見ることでも物語は展開する。小説の中で描かれている当時の社会状況は、支配層の不正腐敗、経済的収奪によって人々が極端な貧困に苦しむ状況を描写しているが、このような現実を農民たちの抵抗を誘発する理由として充分なものとして説明されている。抑圧と搾取は蓄積されて、既得権に対する敵対心はますます大きくなっていくという状況に対する解決策として、洪命憲は農民全体の階級的蜂起について小説を通して呼び掛けたのである。洪命憲が『文芸運動』の中で「新興文芸とは現実から切り離された文学に対抗する現実に基づいた文芸であるべきである、現実から切り離された文化は現実の文芸ではなく、人生は現実と切り離されたものではないからである」と語っているように、「林巨正」という架空の人物も現実と切り離された人物ではなかったのである。彼は最も疎外された階級の人物を、現在における民衆の貧困かつ抑圧の克服意志に関連づけて生々しく描くことにしたのであった。洪命憲は過去の時代と現実の間を言語で貫いて、社会的空間における問題意識の表現とリアリティーの追求を同時に試みたと考えられる。当時の時代において、長い歴史的経験を通して形成された言語と文化が一瞬にして消滅していく過程を目撃した彼は、意識的な母国語の使用によって言語と文化への執着的意志を表現したのであろう。

4 母国語の普及による社会主義と民族主義の実現

安在鴻の民族主義における認識は、日本による植民地支配体制に対する抵抗性だけに限らず、反封建的文明を構築する自律的態度から出発したものと判断することができる。彼は、社会的進歩のための実力主義を標榜し、文物の近代化を追求した。現在における問題点を解決するための努力の一環として過去の民族主義を再検討し、現代の新民族主義との比較を通して、民族と国民、そして国家体制までの概念を統合および同一化することで、近代的形態の集権国家の建設を実現するために、その主体としての民族独立を第一課題として想定したのであろう。独立的国民国家の確立こそが自我の確立であり、伝統的文化を守護するための最優先課題と見た彼にとって、一九一九年の三・一独立運動、並びに一九二九年の光州学生独立運動とは、自主的精神性を前提にした民族の自由と安全、そして生存のために、個々人の自我の協同による精神的前進であり、実践であった。同時に彼は、祖国の独立以上に高い価値を有するものとして個人の自由と人類愛を挙げている。「社会主義と民族主義、いずれも一つのイデオロギーである以前に人間の精神性の発現であるとすれば、一人の自我とは、民族である以前に一人の個人、そして人間であることが前提にならなければいけない⁽⁹⁾」と述べながら、イデオロギーより上位に位置するのは人類全体の共同と協力であると判断した。このためには、個々人が自我を表現できるような思想的環境が必要であると彼は考えたのである。一九二四年六月の『時代日報』において、彼は、「各自の人間が『世界人類の共存』とされる高い理想と深い愛を実践しなければいけない、自らの集団と種族を超越し、社会改造と世界革新の道を進まなければならない⁽¹⁰⁾」と述べ、人類全体の共同

体の実現に向けて努力すべきであると呼び掛けたのである。

また、彼は洪命憲と同じく新幹会の一員として、民族文化の保存運動の一環としてのハングルの再普及による社会的の修正を試みた。安在鴻にとって言語の普及と発展とは、自立的精神性を発揮するための第一要素であると同時に、独創的文字としての固有の言語への復帰は最も鮮明な独立精神の表現であったからであると考えられる。したがって、社会運動としてのハングル普及運動は個人と社会、そして人類に向かって民族の独自の尊厳と権利を訴えるための目的のものであったに違いないと判断することができる。彼は、母国語における些細な発音や音節までもが偉大なる発明・創作であったことを訴えた。我々が思考すること自体が可能であることについても、そもそも長い歴史において継承・拡大してきた固有の言語があるからこそ可能であったのだということ、言い換えれば母国語というものが一定の環境のなかで、それに適合した思考を可能ならしめてきたということに力点を置くのである。彼は「ハングルは我々の血管・骨髓の内部から滲みだされた自然たる音声に、民族の感情と魂を加えて生み出したもの、これに我々の生存と発展、そして繁栄の理念を込めて、自由の行進のための音律を完成すべきである⁽¹⁾と表現することで、母国語による言語の使用が自らの正体を確かめる重大な要素となることを強調したのであった。このように彼は母国語への復帰によって独立への意志を高めると同時に、階級変革のための手段として捉え、植民地の民衆が直面した無気力と非組織的思考そのものを言語的革新を通して克服しようとしたものと考えられる。安在鴻による新民族主義とは、単に植民地体制からの解放と自主的権利の回復にとどまらず、この対植民地闘争を原動力として経済と社会におけるプロレタリアの権利を高める方向に向かわせようとしたところにあると考えられる。下層の階級の人々が無視され、上流階級だけに独占されてきたこれまでの歴史を革新し、我と共同体を一体化させた均等・公言なる国家の実現こそ

が社会主義と民族主義を同時に現実化する手段であると彼は考えていた。当時の朝鮮半島では、ほとんどの人々が植民地主義のために土地を収奪されたことにより無産者となり、半島に暮らす人々を総体的プロレタリアとしてみなすことも困難ではなく、むしろプロレタリアと同義となったのである。

新幹会を通して大衆の啓蒙と大衆教養教育の必要性を訴えた安在鴻だが、一九二九年一月の光州学生事件に連累したとのかどで拘束を受けたことを契機に、現状を指しつつ「歴史的な暗黒状況」と規定した。これからは日常生活における現実的闘争を集中的に展開し、隷属的な植民地支配のための規制と抑圧に対して徹底抗戦することを呼び掛ける⁽¹²⁾と同時に、彼は、民衆の日常生活における意志と感情の自由な表現ができる段階までに汎大衆的な成長拡大を果たすことを目指した。当時の植民地の労働者と農民は搾取され、中小規模の商工業が次々と没落していく現実を目の当たりにした彼は、現実の打破のため「団結は弱者の武器」⁽¹³⁾との論理をうち出し、全世界プロレタリアとの総団結を呼び掛けた。各人がそれぞれ相連する顔を持っているように、その個性と役割も様々であり、人々の多様な個性の集合体である人類もそれぞれにおける存在意義があると考えていた彼は、各個人の自我の覚醒と民族の存在意義を自覚せしめることで現状を打破しようと奔走する。言論・集会・出版の自由を求めて開いた一九二八年の新幹会では、母国語の使用という現実的代替案を宣言の主な要求として取り入れ公表することにしたのであった。彼は、新幹会の将来の活動を見据えて、啓蒙的な思想を敷衍する段階から大きく発展させ、政治的要求と闘争ができる体制にまでを整える必要があるとみて、民族連立政党の創党を通じた団結と自主独立的運動を第一目標⁽¹⁴⁾として設定した。安在鴻は、今後の新幹会の活動における当面の課題として、労働者・農民の啓蒙運動と農作権の確保、母国語本位の教養教育、言論・集会・出版の自由の獲得などを優先させつつ、「民衆の精神は、個性的自由がある時に発展するのであ

り、民衆における集団的個性としての独立国家がある時に自由は発展するのである」と述べて、大衆の意識を前進させることが最優先であることの重要性について説明した。

安在鴻のこのような精神性は、個人の人権と全体における調和の価値を高めるための政治的イデオロギーとして、まずは、大衆が民族の指導的インテリ層との連携を通して独立を果たし、将来的には大衆の中からも指導的インテリ層の一員が輩出できるようにするという啓蒙的社会意識の求めであったと考えられる。社会の一部に限られていたそれまでの過去のインテリ層とは違って、このインテリ層を社会におけるより広範な領域で貢献へと向かわせるようにするには、個人と相関する各分野での「機会の均等」の実現の必要性を訴えることを第一としながら、安在鴻は、組織的社会運動を通して大衆における啓蒙と権益の獲得を実現しようとしたのであろう。

以上のような植民地下という時代状況のもとで担われた洪命憲と安在鴻らの役割は、残念ながらもまだ十分に振り返ることができない。彼らは社会主義系の知識人であり、現在は、南北両方の歴史から抹殺されつつある。彼らの実践的行為が成功であったのか、失敗であったのかは後代の研究者や国家体制に依存していると言えるのではないだろうか。彼らによるこのような思想性が価値を発するのは、個人における変革意識の表現が実践を通して社会的に表出され、結果的な影響力を有した時なのである。

- (1) 洪命憲「語源と史実」『学窓散話』、京城、朝鮮図書株式会社、一九二六年、一頁
- (2) 洪命憲「語源と史実」『学窓散話』、京城、朝鮮図書株式会社、一九二六年、一一〇頁
- (3) 洪命憲「新興文芸の運動」『文芸運動』(創刊号)、京城、文芸運動社、一九二六年一月、六九頁
- (4) 安在鴻「民世安在鴻選集」(第一巻)、ソウル、智識産業社、一九八二年、一二三頁

- (5) 安在鴻『民世安在鴻選集』(第二巻)、ソウル、智識産業社、一九八三年、三六六頁
- (6) 洪命慈「事實的言語について」『新小説』(創刊号)、京城、新小説社、一九二九年二月、七三頁
- (7) 洪命慈「新幹会の使命」『現代評論』(創刊号)、京城、現代評論社、一九二七年一月、一四―一五頁 参照
- (8) 洪命慈「新興文芸の運動」『文芸運動』(創刊号)、京城、文芸運動社、一九二六年一月、六九頁
- (9) 安在鴻『民世安在鴻選集』(第四巻)、ソウル、智識産業社、一九九二年、三三一頁 参照
- (10) 安在鴻『民世安在鴻選集』(第五巻)、ソウル、智識産業社、一九九九年、一七頁
- (11) 安在鴻『民世安在鴻選集』(第二巻)、ソウル、智識産業社、一九八三年、四九〇頁
- (12) 安在鴻『民世安在鴻選集』(第一巻)、ソウル、智識産業社、一九八一年、三四二頁 参照
- (13) 前掲書、二二一頁 参照
- (14) 安在鴻『民世安在鴻選集』(第二巻)、ソウル、智識産業社、一九八三年、二二〇頁 参照
- (15) 安在鴻『民世安在鴻選集』(第五巻)、ソウル、智識産業社、一九九九年、六二頁 参照